

左門脈の5例

佐藤貴弘 大山繁和 上野雅資 大矢雅敏 畦倉 薫
山口俊晴 瀬戸泰之 末永光邦 細井則人 山田和彦
齋藤良太 古賀倫太郎 阪本良弘 山本順司 武藤徹一郎

癌研究会附属病院消化器外科

左門脈は肝臓と胃をつなぐ前腸静脈叢の通路に一致し、流入部の遺残と考えられている。その発生頻度は0.08～0.6%で稀とされている。左門脈の5例を経験したので報告する。

症 例：症例1は69歳の男性で進行胃癌で術前化学療法中で、効果判定目的で腹部造影CT検査を施行された。多列検出型CT GE Light Speed QX-I でえられた連続断面像にて左門脈の存在を指摘され、さらに胃の周囲の動脈系、門脈系を中心にMaximum Intensity Projection (MIP) 法で再構築した。門脈相において噴門周囲からの左胃静脈が肝門部で門脈の左枝P2に流入していた。動脈

相では、左胃動脈等に anomaly は認められなかった。

さらに、この1年間に術中に左門脈と確認された症例は4例であった(症例2-5)。症例2は55歳、女性、胆嚢癌；症例3は73歳、男性、胃癌；症例4は61歳、男性、直腸癌肝転移；症例5は63歳、男性、食道癌であった。しかし、これら4例の肝内における門脈の流入形態までは確認できなかった。

結 語：左門脈の5例を経験した。非侵襲的な3D-CTを用いてのMIP画像は左門脈の流入経路を確認する上で有用であり、その理解は解剖学的アプローチに匹敵するものと考えられた。

Balloon catheter を用いた左右肝動脈交通枝に関する検討

当間雄之 趙 明浩 岡住慎一 牧野治文 三浦文彦 望月亮祐
首藤潔彦 工藤秀寛 松原克彦 郡司 久 落合武徳

千葉大学先端応用外科

目 的：血管造影にて左右肝動脈の交通枝 (communicating arcade) を検討する。

対 象：血管造影を施行した肝門部に病変を認めない9例。

方 法：Balloon 付き catheter を右肝動脈に挿入し、閉塞後、左肝動脈造影を施行する。引き続き MDCT にて、肝門部を中心に circulation study を施行する。

検討項目：Communicating arcade の存在の有無。交通する部位。走行部位。

結 果：血管造影検査を9例全例に、血管造影CT検査を6例に施行した。全例に communicating arcade が確認

された。吻合部位は前区域枝4例、右肝動脈3例、前区域枝と右肝動脈の両方2例であった。血管造影CTでは左右肝管合流部頭側の結合織内を走行していた。

考 察：Communicating arcade は必ず存在し、肝外の左右肝管合流部頭側の hilar plate 内に存在した。また6例中5例で尾状葉枝を分枝しており、さらに communicating arcade が胆管に近接し走行すること、また左肝管の血流に関与するA4からの交通が多いことより肝門部胆管の動脈血流ネットワークにも関連しているものと推察された。